NPO 法人 かごしまホームレス生活者支えあう会

理事長
堀之内　洋一

鹿児島県

2002年にホームレス自立支援法が施行されたことを受けて、鹿児島市内の路上生活者の生活や自立に何かできることはないかと法律や福祉に携わる有志が集まり、2005年から任意団体「鹿児島野宿生活者支えあう会」として、寒い冬に毛布の配布や、週１回のおにぎりの提供、月１回の夜回り巡回をするようになった。その後2007年に「かごしまホームレス生活者支えあう会」を設立し、週３回のおにぎりの提供と炊き出し、月１回の夜回り巡回、医療相談、シャワーの提供、生活保護申請同行支援をはじめ、緊急一時宿泊施設、自立準備ホームの運営も行っている。居宅に移った人たちには、月に１回、料理会を実施、調理習慣を身につけてもらい、食や料理を楽しみながら、コミュニケーションする場を設け、SNS での相談対応も随時行い、社会で孤独にならないよう、細く長い寄り添い支援を継続している。

（推薦者：NPO 法人 やどかりサポート鹿児島）

この度は、栄誉ある社会貢献者表彰を賜りまして、誠にありがとうございます。

鹿児島での市民有志によるホームレス生活者支援の活動は、遡れば、当地ではめずらしい程の2004年の大雪の時からでした。その大雪の中で「公園のおじちゃんはどうしているのだろう？」という幼い子どもの発した、ホームレス生活者を心配し気遣う言葉がありました。それを受けて「大人も何かしら出来る事をはじめなければ」と思い至った人々の文字通りの自発的な手探りの活動が始まったのでした。

その活動から翌年、任意団体「鹿児島野宿生活者支えあう会」が発足し、定期的な炊き出しや夜回りでの声掛け活動が意識的に継続され、同時に「畳に上がった」元ホームレス生活当事者自身からも、この活動を担う人々が現れました。そうした当事者自身と市民有志や活動の中で出会った法や福祉の専門職が手を携えて、2007年には当NPO 法人の設立に至ったのでした。

それからもう16年余りの活動で経験したのは、ホームレス問題と地続きの DV や「孤独死」等の数々でした。その時々の必要に迫られ、交流機会の充実や、事業としての「緊急シェルター」・「自立準備ホーム」の開設運営に努め継続してきました。更には「居住支援法人」化を展望するなど、当 NPO 法人の事業の幅を広げてまいりました。とはいえ、今回の受賞で、先の活動の原点にあった「想い」を忘れてはならないと改めて思う次第です。

加えて当会は当初から、ホームレス生活者の切迫した事態に、毎週３回の炊き出しや月一回の夜回りを継続してまいりました。しかし切迫対処の必要の一方では（ホームレス生活者等の）「社会的排除から、その社会的包摂へ（ソーシャルインクルージョン）」という「地域づくりを描く」必要も強く感じ続けておりました。

そのためもあり、かつこれもまた「孤立・孤独」の防止の必要に迫られてでもあり

ましたが、数年前から元ホームレス生活者の互助会も形成されて交流機会の充実など多彩に展開されています。こうした互助会や当 NPO という社会的資源は、人々にとって言わば入会地（共有地＝コモンズ）とも言えます。

今後、NPO やボランティア、互助会、更には協同組合などの非営利セクターが育んできた自治の能力・領域はその社会的比重を増していくだろうと思います。

末永く見守り育てていただければ幸いです。

▲2013年頃

▲料理会の様子

▲2013年頃 鹿児島市中央公園 おにぎり配りの様子

▲現在のおにぎり配りの様子 甲突川緑地公園

▲個室利用できるシェルター

▲共同生活型シェルター 家族単位での利用も可

一般社団法人 在留外国人支援協会

代表理事
スン　陽子

岐阜県

「やったーの連鎖を」をモットーに日本で暮らす外国人と日本人がよりよく共存できる社会を目指して通訳業務・在留外国人技能実習生支援を行う団体。10年前、主婦だった代表のスン陽子さんは、就職した縫製工場で劣悪な環境で働く、中国人やカンボジア人の技能実習生に出会った。低賃金で、外出するのも許されず、シャッターの閉まったガレージで作業をさせられていた。「奴隷以下の家畜だと思え」と、雇用主の悪質極まりない彼らへの扱いにショックを受けた陽子さんは、少しでも彼らの役に立ちたいとクメール語をゼロから学び、身の回りのお世話をするようになった。そういった経験から、夫のスンさんとともに、24時間365日の通訳・翻訳の業務を行うが、これまで延べ15,000人の外国人労働者の通訳を担当。違法な労働が見られた場合は関係機関との連携も行う。レベルの高いスン夫妻の通訳は評判を呼び、地方検察庁、警察や消防、医療センター、法テラス、企業、JICA などさまざまな団体から声がかかる。そこで得た収入で、在留外国人の生活相談（年500件）、日本語学習・資格取得支援、一時保護支援をするほか、スポーツ大会や BBQ 大会なども開催。今後はカンボジア・シュムリアップに購入した2,000坪の土地を、日本で支援したカンボジア人が、帰国後起業できる場所として、またカンボジアに住む日本人の駆け込み寺として居場所を作りたいと考えている。

（推薦者：一般社団法人 在留外国人支援協会 広報 宇佐見　祐樹）

この度は、このような栄誉ある賞を受賞させていただきましてありがとうございます。

当協会の本業は通訳翻訳業なのですが、そこから一歩踏み込み、在留外国人の方々に寄り添いながら必要とされる生活の支援ができるよう取り組んでいます。

私がこの活動を始めたきっかけは、10年ほど前にハローワークでみつけた「外国人の方と楽しく働ける職場です」という求人内容を見て応募した職場が正に技能実習生さんたちの強制労働の現場だったことでした。日本が大嫌いになって帰っていく姿は、日本人として悲しみ深いものでした。日々の相談事を受けているうちに在留外国人の方々からの需要が高まり、このような活動団体となりました。それから時代と共に実習生さんたちの相談内容も変化してきてまして、現在はキャリアアップの支援に力をいれております。在留外国人キャリアアップ大学プロジェクトとして毎週日曜、無料にて日本語、特定技能試験の勉強会を開講しております。これまでに取り組んだ活動をいくつか紹介させていただきます。

◯在留外国人スキルアップ大学の開講

岐阜県清流の国ぎふ推進補助金を受けて開催。専門家をお迎えして公衆衛生や人格形成など日本で生活やビジネスを行う上で必須となる知識を得るための講座を企画、運営いたしました。また、今後のビジネスシーンで必須とも言えるオンラインミーティングを Zoom で行うための講座も開講しました。

◯在留外国人キャリアアップ大学の開講

JICA 中部の共催を受けて開催。技能実習生を対象にパソコンの基本操作と Microsoft Word を用いた履歴書作成講座を開催いたしました。多くの参加者が初めてパソコンに触れる初心者でしたが、最後には自分の名前などをパソコンで入力して履歴書を作成できるようになりました。

◯カンボジアアンテナショップのオープンと日本語、特定技能試験対策無料勉強会の開催

岐阜駅すぐ近くの場所にカンボジアなど東南アジアの輸入食材・雑貨を扱うアンテナショップをオープンいたしました。単に食材や雑貨を販売するだけではなく、日本人とカンボジア人との交流の場としても活用しています。また、この場所で日本語と特定技能試験対策の勉強会を毎週日曜日に開催しています。

上記のような活動と本人の努力が身を結び、日本語能力試験 N4や特定技能試験に合格し、より良い環境へ転職した実習生も出てまいりました。日本へ来てスキル・キャリアアップを叶え、日本に来て良かったと思ってもらえる在留外国人を増やすべく、今後も草の根活動に邁進していく所存です。

▲特殊免許取得時　エキスパート通訳

▲在留外国人キャリアアップ大学　健康体育　フットサル

▲在留外国人キャリアアップ大学 健康体育　バレーボール

▲JICA 中部共催　在留外国人のパソコン教室

▲清流の国ぎふ　SDGs 推進ネットワーク連携促進補助金
コロナ禍を生き抜く在留外国人

▲JICA 中部共催　在留外国人のパソコン教室

NPO 法人 空家・空地活用サポートＳＡＧＡ

代表理事
塚原　功

佐賀県

佐賀県で空家・空地問題の解決を軸として、様々な社会課題の解決に取り組んでいる団体。塚原功さんは、ハウスメーカーで培った経験を基に建築士、司法書士等、士業と連携し空家対策ネットワークを構築。2016年に現 NPO 法人を設立した。現在、行政・市民活動団体・企業・地域コミュニティと地域課題の解決に連携して取り組んでいる。これまで解決した空家問題は100件以上。空き家を利用した、居住支援では３年で70組ほどの入居支援の実績がある。2022年４月には日本財団の助成でこども第三の居場所を開設し、多世代で交流しながら、こどもの成長を見守る場所として運営している。又、同年５月には空き家を利用し、生活困窮している一人親家庭を対象に、寄付で集めた食品や日用品などを、24時間無料で持ち帰る事が出来る施設「佐賀コミュニティフリッジ」を九州で初めて開設した。広大な空地を活用した災害支援拠点や、大学の空き校舎を利用した、食と災害支援のセントラル倉庫のプロデュースや、外国人留学生向けのシェアハウス・CSO 向けのシェアオフィス、他に福祉施設等向けに空き家を提供している。

（推薦者：佐賀県 県民環境部長 古賀　英敏）

団体の活動及び感想・展望

今回、この様な素晴らしい賞を頂いた事への感謝の念と共に、地方の小さな団体にまでスポットをあてて頂いた事に大変驚いております。本当にありがとうございました。さて、私共は団体名が示すように地域の個々の空き家や空地の困りごとを解決する事を使命として、2016年５月に産声をあげました。

それと同時に私共すべての活動のベースとなる士業等との「空家対策ネットワーク」を構築し、それ以降様々な空家・空地問題の解決を第一の活動としております。第二に中心市街地の店舗付き住居の空き家を利活用し、CSO（市民社会組織）等が低料金で利用できる「**シェアオフィスの運営**」をしており、そこを拠点として行政・民間企業･CSO と連携し「**中心市街地の活性化**」に取組んでおります。第三に、独居高齢者、外国人、ひとり親家庭の方達等（**住宅確保要配慮者**）が、何らかの理由で新たに住まいを確保しなければならない状況に陥った時、その属性で入居を拒まれるケースが社会的問題となっている為、団体の強みを活かし住宅確保要配慮者居住支援法人として「**居住支援**」を行っております。

第四に災害時の「**被災者の仮住まい**」や県外からの災害支援団体の「**拠点確保**」大規模な災害支援団体の災害支援基地の総合プロデュース等も手掛けております。第五に、シェアオフィスの空きスペースを利用して、こどもの貧困や孤立対策の為の「**こども第三の居場所の運営**」。第六に寄付で集めた食品や日用品を登録した貧困のひとり親家庭が、24時間好きな時に利用できる「**コミュニティフリッジ（まちの冷蔵庫）の運営**」。そして大学の空きスペースを有効活用し、自団体も含め、食支援を行っている多数の団体が、食品や日用品等を共同で備蓄できる「**セントラル倉庫**」の総合プ

ロデュースなど、いずれの活動も当団体が得意とする空き家の利活用を軸として、行政・CSO・企業等と連携し取組んでおります。

こういった取組の評価が今回受賞につながったのかと思うと、正直大変嬉しく思いますし、日頃より私共の活動を支援して頂いている方々や、連携して様々なプロジェクトに取り組んでいる他団体に対して感謝の念でいっぱいです。

この受賞を機に、今後も当団体の得意分野である空き家と、社会課題を結びつけることで生まれる、更なる社会課題の解決を目指し活動したいと思います。

▲佐賀空き家地域円卓会議風景

▲コミュニテイースペース付シェアハウス 開所式

▲居住支援ネットワーク勉強会風景

▲佐賀災害支援プラットフォーム（SPF）災害支援風景

▲こどもの居場所そら BBQ 風景

▲コミュニティフリッジ 内部

NPO 法人 ちいきのなかま

理事長
守永　惠

長崎県

守永惠さんは、自身の子育て期から地域活動をボランティアとして開始し、子育てをする人に「仕事」として寄り添うため 2008年に団体を設立、事業も受託し、以来佐世保市で、産前・産後・育児に不安を抱える母親たちを支援してきた。主に子育て経験のある女性たちがサポーターとして、それぞれの家庭環境による不安や問題に丁寧に寄り添い、育児と家庭を支援する活動を行っている。守永さんは自ら行政に赴き、自身の経験を基に、子育て中の母親が必要とする支援を訴え続けた。結果、委託事業、非営利活動においても、きめ細かい様々な事業を実現させて、子育てで孤立しがちな親子に手を差し伸べている。現在、受託事業の「ファミリーサポートセンター事業」では、年間3,000件の利用があり、ボランティアと利用者の登録者は2,400名にも及ぶ。サポーターたちは子育ての不安に自身の経験と研修で最新の知識を学びつつ応え、時には産後鬱や DV 等の問題にいち早く気付き公的支援につなぐ。地域のコミュニケーションも希薄になった今、親を見守り育てる活動は非常に重要で、それを「恩送り」と表現し、後世への継承のため愛情を伝える仕組みづくりを行っている。

（推薦者：子どもの人権アクション 長崎 あじじの会 藤井　淳子）

九州は男性の家事・育児参加において後進地域でしたし、今も全国的に見てまだまだ後進地域です。37年前、ボランティアで始めた「子育て支援」の理解促進の道のりは想定以上に困難なものでした。「子どもを預けて通院したいが、家族の理解が得られない…」と母親の支援が叶わなず、手遅れで入院することになったり、暴力的な夫に悩む方の家庭に「友人のフリ」をして関わり、公的支援につないだ支援もありました。子育て講座をした時には、内容が出産に関わることだったからか、市内の産婦人科の医師から呼び出されて、お叱りを受けたこともあります。そんな時代でした。

私たちの活動の支援者の多くは自身の経験をベースにケースに対応しながらブラッシュアップして、笑顔で日々活動を続けています。活動が楽しいという言葉に私たちが支えられています。

支援者の皆さんは「まひるの星」だなと思います。昼の空にも星は輝いていますが、私たちには見えません。多くの人には見えていないけれど、活動で支えられている人はたくさんいます。支援から時間が経過しても、折にふれ、支援したご家族からお便りがある、という報告をいただきます。また、帰省の時に駅で、偶然昔支えてもらったおばちゃんに会い、荷物が重そうだったからと、かつて支援した子に家まで送ってもらった、とうれしく語る支援者の方もいました。「人は愛されたから愛することができる」数々のエピソードをお聴きしていて、そう思うことができるし、それはとても幸せなことで未来への希望でもあります。

この度の表彰は、この国のさまざまな地域で子育てを地道に支えている、多くの方々の活動への評価だと思い、深く感謝しています。「表彰のニュースを夫に見せて、私

たちの活動はこんなに意義あること」と自慢したという支援者の方がいました。子育て支援という言葉は定着しているのでしょうが、中身を知る人は少ないのかもしれません。今回、表彰という形で評価されるということの意義を感謝の気持ちとともに改めて感じたことでした。

そんな支援者のみなさんが活動を継続できるように「ケアする人をケアする」ことにも私たちは近年注力しています。ここ５年ほど、市内で家を借りて「みんなの実家」事業に取り組んでいます。その場所は子育て世代の方々と地域の高齢者の相互支援の場として育くんでいます。できれば近い将来、今の支援者の方々が、活動をしなくなったとしても集える場所になればと願っています。

▲ぽちぽちいこか食堂（地域食堂）

▲家事サポートの様子

▲見守りサポートの様子

▲子育て当事者・支援者の声を集めた冊子

▲ぽちぽちいこか食堂 子どもたち

▲ぽちぽちいこか食堂 集合写真

NPO 法人 メッシュ・サポート

理事長
塚本　裕樹

沖縄県

沖縄県の琉球諸島全域、及び一部鹿児島の空港を有する離島でヘリコプター・小型飛行機を活用した医療支援活動、空飛ぶ救急車として病気やケガの患者の搬送を行う NPO 法人。心臓や脳の疾患で救命率を左右する15分以内の医療介入を目指し導入されたドクターヘリは、今や全国に配備されているが、沖縄県は離島全てをカバーすることができていない。また県のドクターヘリや自衛隊機が対応しない（緊急性が低いと判断された）、本島に搬送された患者が転院して治療を継続するといった理由で離島に戻る際や、民間機やフェリーでの移動では医療器材の使用に制限や時間がかかり、費用面・体調面で患者への負担が大きく、残りの生涯を本島で終えるしかなかった人などを無料で搬送する。また、数日後に手術を控える患者や、今後体調が更に悪化する可能性がある患者にも同団体が要請を受け搬送を行っており、離島の医師たちから大変感謝されている。活動範囲は沖縄の本島に近い鹿児島県の奄美大島から南側も含め、700km を網羅している。これまでに2,300回以上、月にして30件出動。運営費用は主に会費や寄付で賄われている。

当法人は多くの有人離島を抱える琉球諸島にて、離島医療の抱える問題を改善し、救える命を救うため、航空機を活用した医療活動に取り組んでおります。

主な活動としては、ドクターヘリの導入が困難な沖縄県本島北部地域にて救急ヘリの活動と、琉球諸島全域にて行政の患者搬送手段では対応できない患者の搬送や医師の派遣を担う医療用飛行機の活動となります。

法人設立の切っ掛けは、1992年に初代理事長である小濱正博医師が、両親の故郷である沖縄県の離島診療所にて離島医療に従事した際に、離島における航空医療の有用性を痛感したことに始まります。その後、琉球諸島全域にて医療用航空機の導入を目指して孤高奮闘するなかで、2008年に当法人の設立に至りました。

離島では高度医療に対応できる大きな病院を運営することができないため、離島の病院や診療所にて対応できない患者が発生した際は、都市部にある高度医療の病院まで患者を搬送しなければなりません。沖縄県本島周辺の離島はドクターヘリや当法人が運営している救急ヘリにて搬送され、先島諸島や奄美諸島などの長距離にある離島からの搬送は陸上自衛隊が担っております。陸上自衛隊への搬送要請には災害派遣要請の三要件（緊急性・非代替性・公共性）に適合した事案でなければなりません。例えば、今後、容態の悪化が予想される患者の搬送（準救急搬送）や、都市部にある高度医療の病院にて手術を受けた後、故郷の島の病院に転院する際に、医療器材の使用制限により民間航空機での移動が困難な患者の搬送（帰島搬送）は、緊急性に適合し

ないため搬送することができません。このような離島医療特有の問題を改善するためには、離島医療の需要に対応し、かつ、広域圏域の飛行が可能な搬送手段の構築が必要となります。

問題の改善にあたり、当法人は広域圏域での飛行が可能な医療用飛行機をクラウドファンディングにて導入。2015年10月から2023年９月の間で、41件の準急搬送と51件の帰島搬送、247件の医師派遣を実施し、離島医療の問題改善に貢献してまいりました。この度、社会貢献支援財団様ならびに日本財団様のご支援を頂き、新たな医療用飛行機を整備することができました。これにより今後の活動の道筋を立てることができました。

これまで多くの困難がありましたが、救える命を救うため、諦めずに活動を継続することにより、累計2,600件を超える医療活動を行ってきました。これからも挑戦を続け、未来の離島医療に貢献するため邁進してまいります。この度は、社会貢献者として表彰いただき、心から感謝申し上げます。

▲2023年に導入された機体

▲搬送（琉大→宮古）2019年３月13日

コペルニク

共同創設者兼 CEO
中村　俊裕

インドネシア／東京都

2010年に元国連職員の中村俊裕さんとエヴァ・ヴォイコフスカさんが発展途上国の貧困削減を目的に設立。インドネシアのバリ島に本部を置く団体。これまで27か国において、革新的な技術やサービスを活用して、エネルギー、水・保健衛生、農業・漁業、零細企業支援などの分野で、途上国の社会・環境問題の解決を目指して活動している。現在、「飲料水の浄化」「農業用ソーラー乾燥機導入」「再利用可能な生理用品普及」「女性零細起業家の生計向上」などのプロジェクトを行っている。実施にあたり、高いプロ意識とコスト、時間、資源の効率性、チームワークを重視した綿密なモニタリングを行うと同時に、世界中の企業や公的機関との連携を行っている。その他、インドネシアの自然災害時には緊急支援として、貯水タンクやシェルター、衛生キット、浄水器、仮設トイレ等、現地のニーズに沿った物資を提供する。貧困や環境保全にテクノロジーを用いて解決方法を模索し、さらにビジネスへと発展させ、雇用を促進させている。

途上国への支援は様々な形で行われていますが、いわゆるODA（Official Development Assistance - 政府開発援助）が伝統的に最も目立ったものです。このODAを通じた途上国支援は、例えばJICAなどの2国間支援機関や、国連機関のような多国間支援機関から提供されることが多くあります。これらのODAを通じた途上国支援を取り巻く環境は、近年大きく変化しています。

一つにはODA活動に対して、そもそも途上国の持続可能な開発というインパクトがどれほど出ているのか、を検証しなおそうという流れがあります。RCT（ランダム化比較試験）という方法を使い、1000を超える途上国プロジェクトのインパクト評価を行った、J-PAL（ジャミール貧困対策ラボ）の経済学者らは、2019年にノーベル経済学賞をとりました。2つ目は、税金を使ったODA以外のお金の流れ、そしてそれに伴い政府系機関以外の援助団体が増えているということです。民間資金を財源とするのインパクト投資や、そこからの支援を受けたインパクトを重視するベンチャー企業などが増えています。2つ目との大きく関連する、3つ目の変化は、このように環境が変わる中、今までのやり方だけではだめで、常にイノベーションを起こし、途上国支援においても積極的に新たなアプローチを取り入れていくべきだという考えが支持されるようになってきています。

コペルニクは、このような環境の変化に乗り、途上国の課題を見つけて、解決策となりそうなソリューションに対して実証実験を行い、効果的なソリューションがより多くの途上国支援分野で採用されるように働きかけています。実証実験で、ソリューションがそもそも課題を解決しているのかを見極めることが出来るため、効果の出な

いアプローチを除外することができるのです。さらに、実証実験から派生したベンチャー企業をスピンオフさせて効果を拡大させていくことも狙っており、これまででコペルニクの実証実験を経た社会的企業が２つ生まれています。

今回の受賞は、コペルニクの活動をさらに加速させていく上で、大きな励みとなるものです。推薦者の方々、財団の方々には心より感謝の意を申し上げます。

▲収穫したゴム樹液が、雨季中に雨で流され、収穫を失っていたゴム農家に対し、雨除けを導入する実証実験を行った。この結果、収穫量が70%アップし、他の援助機関がこの雨除けを採用するに至った。

▲コペルニクの実証実験からスピンオフした企業 Magi Farm で扱うアメリカ水アブの幼虫。これが食べ残しの食料を食べて成長し、幼虫のプロテインが飼料となる。

▲日本の企業経営者が Magi Farm の見学に来た時の様子

▲パプア州漁業生活向上支援（保冷剤と断熱容器導入研修の様子）

▲再利用可能な生理用ナプキン配布

▲ソーラーランタン

更生保護法人 備作恵済会 古松園

常務理事・施設長
岩戸　顯

岡山県

明治30年（1897年）に政財界の有志により岡山県岡山市に開設され、罪状に関わらずあらゆる受刑者を受け入れて再犯しない自立への道を指導している、全国でも稀有な民間の更生保護施設。「感動、感銘を受けた時しか、人は変わらない」をモットーに、現施設長の岩戸顯さんが独自に構築した「特別指導」のプログラムを2008年から取り入れている。①自己の性格の問題 ②金銭の問題 ③対人関係の問題 ④家族関係の問題 ⑤立場による考え方の違いについて ⑥再犯をしない決意と生活設計について考える６単元。ロールプレイやドキュメンタリー鑑賞、入所者が感じたことを文章化する作業を通して、自分と犯した罪に向き合い、相手の気持ちを理解し、豊かな人間性の回復を目指す指導となっている。また保護犬によるドッグセラピーや生活相談、就労支援、医療支援の他、退所後のフォローアップも随時行い、社会復帰を手助けしている。。

（推薦者：NPO 法人 食べて語ろう会 理事長 中本　忠子）

更生保護施設における処遇やフォローアップ事業の充実について

「先生帰ったよ！～」事務所に爽やかな声が響く。彼は、６年前に当園で保護していた者である。事件は、飲酒、パチンコ遊びによる浪費のため、姉２人にお金を管理され、思うように現金を入手出来ず苛立ちを募らせていた中、実母に浪費のことで文句を言われ激高して自宅に灯油を撒き、ライターで放火して家屋を全焼させ、寝ていた実母を焼死させたものである。軽度知的障害の本人が飲酒後、単純酩酊下で金銭欲求が満たされず、将来に希望が持てない怒りから希死念慮を募らせた悲惨な事件であった。懲役12年の判決になる。姉２人は地元に帰ることを強行に拒否したため、当園に入ることになった。当園の処遇理念は、彼らに感動・感銘を与え、自らの行動を振り返り、自らが立ち直るように気付かせることにあり、豊かな人間性を取り戻して、再犯をしない決意を固めさせものである。これらの処遇は、職員と彼らに信頼関係がないと、為しえないものである。

当園では、特別指導の一つとして、自分の犯した罪が、何が原因なのか、①自己の問題なのか、②金銭の問題なのか、③対人関係の問題なのか、④家族の問題なのか、⑤性格の問題なのか、を振り返って考えさせ、それぞれの問題についてドキュメンタリー番組を教材にして、例えば身体が不自由でも強く生き抜く姿、災害に見舞われてもなお苦しくても強く生きる姿等を見ることにより考えさせ感動・感銘を与え、自ら頑張ろうとする心の芽生えを醸成するよう働きかけている。感動・感銘を受けさせることなどにより心を大きく動かさなければならない､これが教育だと私は考えている。

当園では昨年度から保護犬（セラピードッグ、名前は「ケンタ」）を飼育している。犬はしゃべらないが、ものを言わない代わりに、表情で応えてくれる。仕事から帰ってきた在園者に耳をぺしゃんこにして、嬉しさを表現してくれる。少しでも彼らの癒

しになれば幸いである。

冒頭の彼は、私を信頼し毎日のように就労継続支援Ｂ型事業所からの帰りに、当園に立ち寄り来ている。もう、かれこれ６年以上になる。今はアパートで一人暮らしをし、炊事をしている（一週間に一度、ヘルパーが来ている）。フォローアップ事業とは言え、誰がいつまで支援するべきなのだろうか。小手先の短期間でよいのか、エンドレスに行くためにはどのようにすればよいのか、悩ましいところである。

過日、フォローアップで訪問して来ていた元・在園生が突然、亡くなった。生活保護の受給者で、その葬儀に参列したが、見送りの家族の少なさに愕然とし、悲しかった。お棺に入れる少量のお花だけで、飾り花は無かった。生まれたときは、周りから祝福されていたろうにと思うと、やり切れない気持ちである。これが、更生保護施設の職員としてフォローアップの最後かと思うと空しさを禁じ得ない。心の繋がりを深く持ち過ぎることも、罪深いものと感じる瞬間がある。

▲セラピードッグの役割を担う保護犬のケンタ君

▲高梁地区更生保護女性会の慰問

▲施設長岩戸さんとケンタ君

▲特別指導の記録

▲話を聞く在園生

一般社団法人 グリーフサポートせたがや

代表理事
粟田　ゆみ

東京都

東日本大震災で広がったグリーフという概念、大切な人を亡くした人に寄り添うグリーフサポートの普及を、子どものグリーフサポートを行う米国のダギーセンターで手法を学び、日本でそれをベースに、死別のグリーフを抱えた子どもや大人、またそれ以外の様々なグリーフを抱える人へのサポートプログラムや相談を、20名のファシリテーターが担っている。2012年に任意団体として発足し、2014年から一般社団法人化。世田谷区にグリーフを抱える人たちの、泣いていい場所、話せる場所となる「サポコハウス」を構え、個別相談や電話相談に対応。また、グリーフやグリーフサポートについて、多くの人々に知ってもらいたいと、講座の開催や、支える側となるファシリテーターを育成する講座も行っている。グリーフを死別に限らず、大切に思っていた人やものを喪失した体験のすべてと、広くとらえている。そこには、離別、暴力被害（安心感の喪失）、紛争や自然災害による被災（住まいや地域とのつながり、経済的な生活手段の喪失）、失業や就職難（希望の喪失）、いじめ、年齢・ジェンダー・民族・宗教・障がい・性的指向等への差別（自尊心やアイデンティティの喪失）、非婚や不妊などへの社会の不寛容（自己肯定感の喪失）などが含まれ、直接・間接的な要因によって起きるすべてをグリーフと考えている。拠点となる「サポコハウス」は「世田谷区らしい空き家等の地域貢献活用モデル事業」の第一号としてオープンした。

（推薦者：NPO 法人 コミュニティ・ネットワーク・ウェーブ 理事長 佐光　正子）

このたびは、社会貢献者表彰をいただき、心より感謝申し上げます。

障害のある人もない人も、高齢者も子どもも若者も、すべての人が家庭や地域の中で普通に日常生活を送り、支えあって暮らす社会（ノーマライゼーション）の実現をめざして1994年から活動されている NPO 法人コミュニティ・ネットワーク・ウェーブの佐光さんに推薦していただきました。

全国のみならず、世界中で地道に活動されているみなさまと共に受賞させていただき、大変光栄に思います。認定 NPO 法人　児童虐待防止協会のみなさま、新庄民話の会のみなさま、溝口 伸之さまと同席させていただき、貴重なお話しをうかがう機会を得ることができ、大変豊かな時間をすごさせていただきました。ありがとうございました。

「グリ―フサポートせたがや」は、大切な人やものをなくしたおとなやこどもが集い、ゆっくり自分のペースで自分の経験や気持ちに触れることが出来る家「サポコハウス」を世田谷区太子堂で運営しています。

グリ―フとは、喪失に対する反応です。人生はさまざまな変化の連続であり、すべての変化にはグリ―フがともなうと言えます。グリ―フの衝撃や影響は一人ひとり違い「グリ―フと向き合う力」は、一人ひとりの中にある（誰もが生まれながらにもっている力）と考えます。グリーフサポートに大切なことは、一人ひとりに合ったやり方、それぞれのペースで丁寧にグリ―フと向き合うことが出来る安心で安全な場を提

供することであると考えます。

「グリーフサポートせたがや」では「グリーフサポートプログラム」（こどもプログラム、おとなプログラム、パートナー死別サポートプログラム）の開催、個別相談（対面相談及び電話相談）の実施、グリーフをテーマとした連続講座の開催、その講演録を発行しています。グリーフサポートプログラムを運営するファシリテーターの養成講座も開催してます。また、主に世田谷区の行政と連携し、ケアに携わる方々、区民のみなさんに向けてのグリーフ、グリーフサポートに関するワークショップを開催しています。

2014年に活動を開始してから10周年を迎える節目に表彰していただいたことを大変感慨深く思うと同時に、今後もグリーフを抱える人々を地域で支え、だれも取り残さないつながり先として地道に活動を継続し、安心・安全な場を提供していきたいと思います。

▲玄関

▲部屋に入るときの約束ごと

▲たたみの部屋

▲火山の部屋

▲対面相談は糸の部屋で

▲ダイニングルームでほっと一息

在神戸ベトナム寺院 和楽寺

住　職
THICH DUC TRI（ティック ドゥック チー）

兵庫県

和楽寺は国内10ヵ所あるベトナム仏教寺院の１つで、埼玉県のベトナム仏教寺院「大恩寺」が行っている在留ベトナム人を支援する活動に倣い、2012年に神戸市長田区に建立された。ティック・ニュアン・フォー住職を中心に、空き家になっていた住宅を信者等の寄付で購入し改築、２階が釈迦如来像など３体の仏像などが安置された本堂、１階が交流スペースになっている。現在、フォーさんの下で出家したティック・ドゥック・チさんが住職を務める。寺では1. ベトナム仏教を教える2. 日本で生まれた２世や３世（日本国籍）への生活支援　3. 日本に来た留学生や技能実習生への支援を行っているが、相談事が最も多く、ほぼ毎日一日中寄せられ対応に忙しい。在ベトナム領事館や大使館、警察からも問い合わせがある。コロナ禍の２年間は、宿泊業や飲食業でアルバイトをする留学生を含む多くのベトナム人が困窮した。寺に寄せられた日用品や飲料を分け合ってしのぎ、帰国できない多くの人が寺に避難していた。法務省出入国在留管理庁によると、現在日本において在留ベトナム人は約48万人で中国人に次ぐ多さ。兵庫県下に8,000人、大阪府下に16,000人が暮らしている。そんな在留ベトナム人が「帰ってくる場所」家のような心の拠り所となるよう努めている。

（推薦者：大恩寺ベトナム寺院 ティック・タム・チー）

第60回社会貢献者表彰式典に参加して、心から感動しました。この素晴らしいイベントに参加する機会を得たことを光栄に感じました。

この式典は、社会貢献のさまざまな分野で優れた業績を上げた個人や団体を表彰するために開催されました。そのため、会場には多くの素晴らしい人々が集まっていました。彼らの活動や努力、そして社会への貢献についてのプレゼンテーションを聞くことができ、その人々の情熱に触れることができました。彼らの活動は、地域社会への貢献や環境保護、教育支援、健康への取り組みなど、多岐にわたるものでした。それぞれの分野で、彼らが目指す社会の理想像に向けて、一歩一歩進んでいく姿勢に感銘を受けました。

さらに、この式典は、社会貢献者たちの活動を称えるだけでなく、他の参加者たちにも共感と励ましを与える場となっていました。多くの人々が、自身の分野での挑戦や困難に直面している中で、他の人々の成功や希望を見ることで、自らの活動に対して更なる意欲を持つことができるのです。私もその一人であり、彼らの活動を聞くことで、自らの社会貢献活動に対する意欲が高まりました。

一人一人が自身の力や才能を活かし、社会に何かを与えることは、私たちが持つべき責任であり、また喜びでもあります。社会貢献は、個人や団体だけでなく、社会全体の発展や幸福につながるものです。この式典は、社会貢献の大切さを広く伝えるとともに、社会をより良くするための活動を奨励していました。

最後に、この式典に参加して、私は新たな視点を得ることができました。社会貢献

者たちの活動や努力に触れることで、社会への貢献の重要性を再確認することができました。これからも自分自身の力を最大限に活かし、在日ベトナム労働者に様々な活動を貢献する姿勢を持ち続けたいと思います。改めて公益財団法人社会貢献支援財団の皆様に感謝しております。

▲2021年 コロナの影響で生活困窮者にお米・食材を支援

▲2021年 帰国できないベトナム人に住まいと食事を支援

▲2022年大阪で日本・ベトナム伝統的な音楽交流会を開催

▲2023年 和歌山県で溺死したベトナム実習生の法要

▲2023年若者向けの夏の勉強会を開催

▲毎月の活動 心の相談・心理カウンセリング

L.B.C.

創立者
大橋　智子

福岡県

L.B.C.（Law Braille Circle　法律を点訳するサークルの意）は、1979年「化学実験中の爆発事故で失明した高校生が九州大学への進学にあたりサポートを募る」というニュースを目にした大橋智子さんが応募し、活動を始めた点訳ボランティアサークル。それまで専業主婦をしていた大橋さんは全く点訳の知識がなく、一から点訳を学んだ。法学部に進学したその学生のために、大学の教科書やテスト、かなり難易度の高い法律用語を点訳することもあり自身も勉強が必要だったが、その努力すらも面白かったそう。その後に担当した学生は数学を専攻したので、更なる挑戦となった図形の点訳も手がけた。1985年には任意団体として８名のメンバーとともに活動を本格化し、現在は32名のボランティアが集う。当初は手動式点字タイプライターを使用していたたが、1990年パソコンの寄贈を契機に、現在はコンピューターソフトを使い、メンバーとはデータをやりとりして校正作業を行い、自宅で作業を完結できるようになった。活動は評判を呼び、様々な要請に応えている。大橋さんは88歳の今も仲間とともに点訳を続けており、ラジオ英会話のテキスト点訳を初稿、チェックと役割分担して完成させ、目の不自由な方に届けている。

（推薦者：社会福祉法人 福岡市社会福祉協議会）

この度は社会貢献支援財団様より表彰を賜り、感謝申し上げます。

式典で受賞者の皆さまとお話をし、色んな方が、色んな形で世の中に目を配り、手を差し伸べておられる事を知り、安心感と共に嬉しく思いました。

私は点訳を通じて多くの方々と手を繋ぐことが出来ました。校正作業は一人ではできない為、グループの方々と意見を交わし、間違いのない文章にするよう心掛けねばなりません。

色んな依頼がありますが「お友達とカラオケに行きたいから歌詞の点訳をお願いします」という依頼は嬉しい事でした。この様に日常生活を楽しんで貰える事こそ、私共の喜びとなるところです。

一方、学生生活に必要な点訳も大切です。初めての点訳は九大法学部の学生さんへの点訳でした。専門の法律用語を正確に伝えられるか心配でしたが、担当教授が「難しく考えず、分かりやすい言葉で良いですよ」と声を掛けて下さり気持ちが軽くなりました。

数学専攻の学生さんへの点訳は、１つの式が点字では何行にも及ぶことがあり、この式がどこから始まるのか理解できるのだろうか、心配もありましたが、図式や数式にも挑戦しました。

その後は英文科の学生さんからの依頼と、次々と依頼を受ける様になり、グループの人数が増えたとはいえ、忙しい日々を送りました。英文科の学生さんは、トップで卒業され、私たち点訳者も卒業式に招待頂き、感動した事を覚えています。

現在は、NHK ラジオ英会話のテキストの点訳も手掛けており「サピエ図書館」サ

イトからダウンロードが可能です。

必要な方へ手助けが出来ることが、グループ全員の遣り甲斐になっております。

活動を始めてから40年近く経ちますが、もうしばらく皆さんと力を合わせ続けていきたいと思っております。

▲点訳グループの皆さん

▲例会

▲点訳の校正中

▲点訳前のテキストごとの打ち合わせ

NPO 法人 Alz 柏わの会

理事長
柏木　とき江

千葉県

柏木とき江さんは1990年代、脳、心臓疾患をメインとした急性期を標榜する筑波記念病院（つくば市）で、看護管理者として働いていた。当時の日本の高齢化率は14%、認知症（当時は痴呆と言われていた）は人の尊厳に関わる病気にもかかわらず、医療も行政も病気と言う概念はなかった。しかし、認知症で悩んでいる家族からの相談は暴力、徘徊、昼夜逆転等の深刻な内容だった。県も認知症患者が入院できるよう、県内精神科病院６箇所を指定していたが、受け入れは少なく、保健所から精神科のない同院の一般病棟に入院させてほしいとの依頼が度々あり、積極的に受け入れていたため看護は激務と化した。故筑波大学脳神経外科名誉教授牧豊医師の「認知症は早期の段階で、前頭前野を刺激すれば治る」との言葉で、認知症に特化した通所リハビリステーション（デイケア）を始めた。月１回を２年間無料で実施していたが、看護師を２名配置することで施設基準をクリアし、デイケアの開設にこぎつけた。2000年に入り、全国組織となる「認知症の人と家族の会（旧呆け老人をかかえる家族の会）」の全国41番目の茨城県支部設立に協力。副代表として企画・運営・実施に携わった。病院定年した３年後、家族の会からも離れた後、講演活動や「認知症サポーター」養成に携わるとともに、「特定非営利法人ともに歩む認知症の会・茨城（水戸市）」を設立。その後「特定非営利法人　Alz 柏わの会」も設立して理事長に就任。これまでに培った経験を活かし認知症患者やその家族の相談窓口となり、啓発活動を続けている。

（推薦者：公益社団法人 茨城県看護協会 会長 白川　洋子）

この度は、大変栄誉ある賞を頂き、大変うれしく思います。誠にありがとうございます。また、当法人の活動を応援してくださっている支援者の皆様、ボランティアとして活動に加わってくださいました皆様に、心から感謝申し上げます。

世界保健機構（WHO）が昨秋発表した推計では、世界の認知症患者は約5,500万人。日本では730人万人と推計されています。高齢化が進み他人ごとではない自分の問題と誰もが関心をもっている認知症について活動をしています。

2017年９月 NPO 法人ともに歩む認知症の会茨城、2022年11月 NPO 法人 Alz 柏わの会を設立し、現在に至っています。

活動が目指すことは、認知症機能低下や認知症を患っている本人、介護家族、認知症に関心のある人々等が集い、本人や介護者から学んだ体験を楽しく伝えあい、知識の共有をしながら、信頼できる仲間作りを、さらに、地域の理解を深めるために認知症について啓発活動を行い、本人や介護者がいつまでも、住み慣れた地域で、本人の力を最大限に生かせるような生活や活動を支え、自己肯定感を持ちつつ、自分らしく暮らし続けられることを目指した支援活動です。具体的には月２回、近隣センターなどの公の場所をお借りし、本人や介護家族少し認知機能が低下し「ちょっと不安、いろいろ知りたい」等の認知症に関心がある人たちが集まり、一回に10人から20人集まり、初めに司会から守秘義務やしっかり聴くことなど４点ほどのルールを伝えます。

前半のプログラムは、フレイル予防の一つでもある、声を出すこと、相手が聞き取れる声量で話す近況報告等、後半は筋トレや笑いヨガなどです。その他、役員が集まり企画（月１回）の打合せや無料電話相談（月２～６件、今年度前半では延べ28件）、地域でキャラバンメイトとしてサポーター養成の講師や月２回地元でのワンポイントレッスン「健康で暮らすには」などの啓発活動をしています。

看護師として現役で管理職をする傍ら認知症の支援をし、そこから学んだことを地域に生かせることができ、自分としては大変幸せと感謝しています。

私たちの活動は本当に地味な活動ですが、この度この様な素晴らしい賞で公の形で認めて頂き、自分たちの努力が報われましたことに大きな喜びと共に、今後ますますの励みになります。

▲オレンジ・サロン　リフレッシュ・ヨガ

▲健康な時こそ認知症について学ぶことが重要

▲認知症について学ぶ

▲認知症を予防する　生活をととのえることが重要

▲毎年９月21日は世界アルツハイマーデー 街角でチラシ配布

▲オレンジ・カフェ　料理は最高の脳トレ

一般社団法人 OCNet 大田区中国帰国者センター

副代表
都野　圭子

東京都

戦争によって中国に置き去りにされた残留孤児と言われた戦争の犠牲者である人たちを支援してきた団体。1972年日中国交正常化後、在留邦人の帰国が本格化した1980年代。故鈴木昭彦さんが、大田区から委託を受け2009年に創設。永住帰国をした残留邦人の平均年齢は当時50代後半、１人１人育った環境が違うが、その多くが日本語の習得が困難で就労も難しかった。生活習慣も違い、地域で孤立した生活を送る帰国者のために、生活・健康相談、日本語教室の開催、医療通訳者の派遣の他、心身の健康維持に、太極拳、卓球、ダンスのレクリエーションや国内旅行、春節のつどい、料理教室等、交流活動を実施し多様な要望に応えている。コロナの長期化でひとりの帰国者が自死したことを受けて、安否確認、メンタルケアにも力を入れている。2016年に鈴木さんが病に倒れるも、夫人の洋子さんが遺志を継いでセンター代表になり、帰国者支援に尽力。大田区に住む２世、３世を含む300人の帰国者からの信頼は厚く、年間400件近い相談が寄せられている。設立10周年を記念し、満蒙開拓、戦中戦後の時代を生き抜いた帰国者の人生をインタビュー形式で聞き取り、２年半費やして「私たちの歩み」を2020年に刊行。国、東京都、大田区内の小・中学校、図書館に配布され、次世代に戦争の記憶を語り継ぐ貴重な資料となっている。

（推薦者：宮崎 慶文）

この度は栄えある賞をいただき、喜びでいっぱいです。表彰状を頂戴し、心のこもった式に参加できましたことにも感銘を受けております。選考委員の皆様、スタッフの皆様のご尽力に対しまして改めて感謝と尊敬を申し上げます。

また受賞された他の方たちとの交流の機会をいただき、皆様が多彩な支援活動をされていることを認識できたのも、意義深いことでした。

わたしたちは15年前から大田区を拠点に中国からの帰国者（残留孤児とその家族）の支援をおこなっています。現在大田区には法で定義されている国費帰国者だけで52世帯80名以上が居住しています。わたしたちが何らかの形で支援をおこなっている帰国者とその家族は100名以上です。

かつて戦前戦中に「満蒙開拓団」として中国東北部に家族ぐるみで送り出された人々がいました。終戦の大混乱の際に、両親と離別死別して孤児となってしまった子どもたちが多くいます。その後、中国人家庭に引き取られるなどして、大陸で生き抜いてきました。成人して帰国を希望しても文革期の混乱もあり、1972年の中国と日本の国交正常化以降も帰国はなかなか進まず、帰国できた時は中高年になっていました。

日本語を不自由なく話せる帰国者は少なく、日常生活にも困難があります。

ことばの壁、生活習慣の違いから地域から孤立している人たちもいます。わたしたちは医療通訳派遣（医療機関を受診する時に同行）、日本語教室開催（日常に必要な日本語をレベル別に指導）、中国語での生活相談（住宅相談からスマホ PC の使い方まで）を中心にいくつかの事業を展開して、帰国者の方々が安心して暮らせるよう支

援をしています。最近では高齢化が進み、介護が必要な方たちも増加してきましたが、中国語での介護サービスはほとんどないことから、わたしたちはデイサービス的な機能も果たしたく、書道、合唱などの文化活動や舞踊、卓球など身体活動も主催しています。

中国帰国者の方々が歴史の証人であり、戦争の犠牲者であることを踏まえ、まだ終わっていない戦後処理の一つとして、帰国者が地域社会に融和し、安心して老後を送るために今後も活動を継続して行きます。

▲栃木県護国寺満蒙開拓団慰霊碑

▲帰国者センターの集いで残留孤児の証言

▲医療相談会

▲太極拳

▲サロン活動 ダンス

▲書道教室

溝口 伸之

株式会社きらきら
代表取締役社長

福岡県

徐々に筋肉が衰える難病、脊髄性筋萎縮症。24時間介助が必要なこの病気に１歳の時、診断された溝口伸之さんは、難病患者を介護する家族の負担や大変さを経験し、30歳で障がい者の訪問介護や移動支援などを行う会社を福岡市に設立した。以降およそ20年にわたり活動するなかで、福岡市の「障がい者生活支援事業所連絡会」「民間障がい施設協議会」「障がい者差別をなくす会」「難病対策地域協議会」等、数多くの団体役員・役職として奔走、福祉行政に参画している。また障がい者１人１人の生活の課題を、事業所経営者と、当事者の視点で、問題提起や政策提言等を行う。国の福祉メニューにはない、施設へ移動すら難しい重度者のため、訪問型レスパイト事業を溝口さんが福岡市に提案すると、福岡市の独自施策として制度化された。のちに福岡県が市の制度をもとに、同じサービスを設けるなど大きく貢献した。さらに地域課題でもある、医療的ケアが必要な重度障がい者の受け皿不足を解消するため、医師や福祉関係者とともに「医行為の必要な障がい者の福祉型短期入所への受け入れ促進に関する提言書」を作成し、自らの法人で、医療的ケアが必要な重度障がい者に対応する施設を開所し、その実情や見通しを福祉行政や国に届けている。また、2014年度から日本筋ジストロフィー協会の福岡県支部長を務め、クルージング体験やバイオリンリサイタル、車いすで熱気球に乗るイベント等、独自の交流行事を実施し、支部会員の患者、家族のために尽力している。

（推薦者：一般社団法人 日本筋ジストロフィー協会）

障がいのある人にとって社会環境は近年大きく改善されましたが、それでもまだ多くの残された課題や新たに生じた課題にぶつかっています。障がい当事者であり、障がい者の在宅生活を支援する会社を経営している私としては、まさに終わりのない闘いです。全国には障がい福祉に日々尽力されている方が多くいらっしゃる中、第60回社会貢献者表彰の受賞にいささか恐縮しているところですが、これまでやってきたことが評価され、素直に喜んでいます。

生まれてすぐに脊髄性筋萎縮症と診断され、幼少期より車椅子生活でした。病気の仲間たちが若くして亡くなる姿をたくさん見てきました。一度きりの人生ならば納得のいく人生を送りたいと、病院を退院し地域の高校へ進学しましたが、母がガンで亡くなり、再び病院生活を余儀なくされました。私なりに描いていた夢や希望も打ち砕かれ、絶望感でいっぱいでしたが、ふと振り返ったときに支えてくれている人や見守ってくれている人の存在に気づき、自分は幸せだと感じたのです。

その恩返しに、これまでの経験を活かし、障がい者の在宅生活を支援する会社を30歳の時に設立しました。近年では全国的課題となっている医療的ケアの必要な重度障がい者の支援施設や訪問看護事業所等を立ち上げ、注力しています。日本筋ジストロフィー協会福岡県支部長や福岡市の業界団体、当事者団体等の役員・役職を数多く担い、障がい者の生活課題や社会環境の改善に取り組んでいます。福岡市の障がい福祉

行政に参画する機会も頂き、その中で提案したことが福岡市や福岡県の独自施策として事業化されました。

20代の頃「なぜ病気の体、障がいのある体に生まれたのだろう」と考え込んだこともあります。答えの出なかった若い頃と違い、今ではこう答えます。「地域福祉を一歩二歩前進させること」「障がいがあっても安心して暮らせる地域社会にすること」これが私の使命だと考えています。もう手も足もほとんど動きません。しかし、これまでも想いだけでここまでやってきました。命ある限りこれからも一生懸命に生きて、少しでも社会貢献できればと思います。そして、人生の最期に「幸せだった」と言えるような人生となるように歩み続けます。

▲患者交流会（音楽鑑賞会）

▲患者交流会（熱気球体験）

▲車椅子芸人トークイベント主催

▲患者交流会（クルージング体験）

▲会社主催の新春の集い（社内外に事業報告や方針説明、親睦を深める）

▲福岡県難病患者担当と福岡県議会議員に要望活動

MAINALI（マイナリ） SACHIN（サチン）、ALE（アレ） MAGAR（マガル） SUMAN（スマン）、GHALE（ガレ） NIRAJ（ニラズ）

MAINALI SACHIN

ALE MAGAR SUMAN

GHALE NIRAJ

広島県

2022年５月 JR 山陽本線海田市（かいたいち）駅付近の線路内で動けなくなってい高齢の夫婦を、広島福祉専門学校の留学生で、当時まだネパールから来日したばかりの３人が連携して線路内から救助し、重大事故を未然に防いだ。サチンさんとニラズさんは寮の近くの公園にいたが、そこへ切羽詰まった女性の声が聞こえてきたので２人は声の方角を探ると、線路の中で老夫婦が倒れもがいていて、自力では立ち上がれず、助けなしには脱出できない危険な状態と思われた。２人が公園から線路の方に駆け寄る途中、遅れてきたスマンさんが加わった。線路際まで来たが、線路は大きくカーブしていて列車の動きがわからなかったためスマンさんは駅が見える場所まで移動して列車の様子を確かめる役を引き受け、サチンさんとニラズさんは線路内に入り老夫婦のもとに向かった。認知症と思われるその男性の脇を抱えて歩き出したところ、突然警報機が鳴り遮断機も下りてきたので、スマンさんが伝えてくれる列車の動きを測って、列車を避けられる線路脇へ一緒に移動し、通り過ぎるのを待った。直後に列車が通り過ぎ、線路から出て皆の無事を確認出来てひと息ついた後、老夫婦は礼を言って帰っていった。一連の出来事を近くで見ていた住民が警察に伝えたことで３人は警察署長から感謝状を授与された。

（推薦者：一般社団法人 ええじゃん）

すばらしい賞をいただき、ありがとうございました。すばらしい表彰式も、ありがとうございました。日本に来てから毎日、学校と寮とアルバイトだけ行く生活ですから、夢のような時間でした。

わたしたちは、高齢の夫婦を助けましたが、ネパールでは困った人がいたら助けるのは当たり前です。だから受賞は、少し恥ずかしいです。

あの時、私も友達も、自分のことは考えませんでした。人のために一生懸命になって行動できたことが、私たちは一番うれしかったのです。でも、素晴らしい賞をもらって、またうれしくなりました。そして、ネパールにいる父が喜んで、授賞式に着るスーツを贈ってくれました。これもとてもうれしかったです。

日本に来て、一つのことから、多くのうれしいことが生まれました。本当にありがとうございました。

MAINALI SACHIN

すばらしい賞をいただきまして、ありがとうございました。

わたしたちはネパールで普通に暮らしていました。でも日本に来たら、小さな子供のように何もできなくなりました。言葉がわかりません、いろいろなルールや、やり方が違います。ネパールでは車を運転していたのに、日本ではバイクの免許もまだとれません。大人なのに、何もできなくなりました。でも、人を助けることができました。私は、それが一番うれしかったです。

日本で何もできない私たちに、助けてと言ってくれたおばあさん、ありがとうございます。それを表彰してくれた皆さん、ありがとうございました。　**GHALE NIRAJ**

表彰していただき、まことにありがとうございます。大変素晴らしい表彰式や、貴財団の働きを知り、他の受賞した皆さんに会い、日本の豊かさに驚きました。

表彰式の時、どんな人が受賞しているのか知りたいと思いました。日本語能力がまだ低いし、日本の文化がよくわかりませんので、多くの説明がわかりませんでした。でも、私たちのように普通のことを１回した人はいません、長い間努力して人を助けている人が受賞したことはわかりました。受賞は本当にうれしかったのですが、他の人達と違うので、私たちが受賞してよかったのでしょうか、と考えました。

でも、ネパールの両親はとても喜んでくれました。今私は日本にいて両親の手伝いは何もできなくなりましたが、少し親孝行ができました。表彰していただき、本当にありがとうございました。この表彰を誇りに、日本で頑張ります。　**ALE MAGAR SUMAN**

▲救助を行った線路付近

▲海田市駅付近の線路

▲現地での入学案内

▲着物を着ました

▲スピーチコンテストに参加

年度別表彰分野・受賞者数の実績

年／回 分野	1回 昭46	2回 47	3回 48	4回 49	5回 50	6回 51	7回 52	8回 53	9回 54	10回 55	小計
人命救助等	93	203	156	157	213	197	235	255	230	183	1922
国際社会への貢献											0
青少年育成・スポーツの振興	14	21	33	101	111	95	97	81	75	76	704
社会福祉への貢献	62	58	82	149	140	200	149	114	102	119	1175
文化の振興				3	7	11	5	9	11	11	57
地域社会への貢献	14	18	12	14	26	19	20	15	12	14	164
運輸交通への貢献	23	15	16	24		43	66	57	55	52	351
その他	34	35	87	97	114	95	105	135	139	105	946
小計	240	350	386	545	611	660	677	666	624	560	5319
開催日	3/23	11/10	10/26	9/26	12/10	11/5	11/8	11/7	11/7	11/21	
式典会場	①ホテルニューオータニ				②笹川記念会館						

年／回 分野	11回 昭56	12回 57	13回 58	14回 59	15回 60	16回 61	17回 62	18回 63	19回 平元	20回 2	小計
人命救助等	195	208	177	198	274	193	106	127	89	98	1665
国際社会への貢献										19	19
青少年育成・スポーツの振興	81	93	89	78	92	117	22	24	26	26	648
社会福祉への貢献	95	112	124	109	104	103	38	38	46	57	826
文化の振興	16	13	17	20	19	12	9	7	13	8	134
地域社会への貢献	15	12	12	15	8	13		3	7	11	96
運輸交通への貢献	42	40	38	45	35	31	55	54	69	76	485
その他	96	95	104	94	86	56	57	48	39	10	685
小計	540	573	561	559	618	525	287	301	289	305	4558
開催日	11/5	11/30	11/16	11/6	11/20	11/21	11/10	11/8	11/8	10/9	
式典会場	②笹川記念会館										

年／回 分野	21回 平3	22回 4	23回 5	24回 6	25回 7	26回 8	27回 9	28回 10		小計	受賞者合計
人命救助等	101	82	34	15	47	21	27	16		343	3930
国際社会への貢献	13	17	14	4	8	5	5	6		72	91
青少年育成・スポーツの振興	40	54	44	29	22	25	28	32		274	1626
社会福祉への貢献	64	75	68	28	36	37	34	42		384	2385
文化の振興	11	15	10	3	8	10	10	12		79	270
地域社会への貢献	12	9	4	7	14	20	19	19		104	364
運輸交通への貢献	83	80	49	18	14	18	16	20		298	1134
その他	13	7	7	0	0	0	0	0		27	1658
小計	337	339	230	104	149	136	139	147		1581	11458
開催日	11/7	11/5	11/1	11/7	11/1	11/12	11/13	11/9			
式典会場	②笹川記念会館		③ホテル海洋			④東京全日空ホテル					

年／回 分野	29回 平11	30回 12	31回 13	32回 14	33回 15	34回 16	35回 17	36回 18		小計	受賞者合計
第一部門 緊急時の功績	6	5	6	8	5	4	5	2		41	
第二部門 多年にわたる功労	14	15	11	12	13	11	11	18		105	
第三部門 特定分野の功績		4	7	8	8	11	9	9		56	
（海の貢献賞）			2	1	3	3	4	2		15	
（国際協力）		2	2	1	0	2	0	0		7	
（ハッピーファミリー）		0	0	2	1	3	1	2		9	
（21世紀若者）		2	3	4	4	3	4	5		25	
こども読書推進賞					3	3	3	3		12	
小　計	20	24	24	28	29	29	28	32		214	11672
開 催 日	11/10	11/22	10/29	11/19	11/ 4	11/15	11/16	11/20			
式典会場	④	①	④東京全日空ホテル								

※平成11年度より一般からの個人推薦を受付。
平成11年度より表彰分野別功績内容を、部門別功績内容とする。
平成12年度より第三部門を新設、テーマを持った特定の功績に対応する。
平成15年度よりこども読書推進賞を新設。

年／回 分野	37回 平19	38回 20	39回 21	40回 22	41回 23	42回 24	43回 25	44回 26	45回 27	小計	受賞者合計
人命救助の功績	9	13	11	11	8		3	9	0	64	
社会貢献の功績	33	35	34	34	39		36	35	47	293	
特定分野の功績 （海の貢献賞）	1	2	3	5	2		2	0	0	15	
海への貢献の功績								3	2	5	
こども読書推進賞 表彰式：6／26 会場：虎ノ門パストラル	1									1	
東日本大震災における貢献者表彰 表彰式：5／1 帝国ホテル						128	12			140	
小　計	44	50	48	50	49	128	53	47	49	518	12190
開 催 日	11/13	11/17	11/24	11/16	11/21	5／1	11/25	12/ 1	11/30		
式典会場	④ ANA インターコンチネンタルホテル				⑤帝国ホテル						
											12190

平成19年度より分野名を変更。こども読書推進賞は最終回。
平成24年度は東日本大震災における貢献者を表彰。
平成26年度より特定分野の功績（海の貢献賞）は海への貢献の功績に変更。

年／回 分野	46回 平28	47回 28	48回 29	49回 29	50回 30	51回 30	52回 令1	53回 1	54回 2	小計	受賞者合計
人命救助の功績	9		11		11	8	4	3		46	
社会貢献の功績	11	51	17	53	29	32	33	37	39	302	
小　計	20	51	28	53	40	40	37	40	39	348	12538
開 催 日	7／1	11/28	7 /21	11/27	7／6	11/26	7 /22	11/25	8 /24		
式典会場	⑤帝国ホテル										
											12538

年／回 分野	55回 令２	56回 3	57回 令4	58回 令4	59回 令5	60回 令5				小計	受賞者合計
人命救助の功績											
社会貢献の功績	41	40	30	29	30	30				200	
小　計	41	40	30	29	30	30				200	12738
開催日	11/30	11/29	7/25	12/5	7/31	11/27					
式典会場	⑤帝国ホテル										
											12738

平成28年度より年に２回式典を開催。
令和２年度より人命救助の功績は社会貢献の功績に含む。

都道府県別受賞者内訳

県　名	第59回までの累計	第60回受賞者	受賞者数
北海道	671		671
青森県	181		181
岩手県	217		217
宮城県	399	1	400
秋田県	126		126
山形県	157	1	158
福島県	182		182
茨城県	205		205
栃木県	152		152
群馬県	245		245
埼玉県	480		480
千葉県	405	2	407
東京都	1,239	3	1242
神奈川県	642	1	643
新潟県	265	1	266
富山県	144		144
石川県	144		144
福井県	205		205
山梨県	136		136
長野県	203		203
岐阜県	218	1	219
静岡県	324	1	325
愛知県	323		323
三重県	164		164
滋賀県	101		101

県　名	第59回までの累計	第60回受賞者	受賞者数
京都府	221		221
大阪府	511	2	513
兵庫県	526	1	527
奈良県	115		115
和歌山県	144	1	145
鳥取県	95		95
島根県	112		112
岡山県	312	1	313
広島県	422	2	424
山口県	277	1	278
徳島県	177		177
香川県	196		196
愛媛県	151		151
高知県	75	1	76
福岡県	563	4	567
佐賀県	135	1	136
長崎県	270	1	271
熊本県	236		236
大分県	132		132
宮崎県	75		75
鹿児島県	146	1	147
沖縄県	175	1	176
その他	114	2	116
合　計	12,708	30	12,738

※受賞者数は、当財団設立の昭和46年からの都道府県別受賞者件数の累計
※県名は、受賞者居住地の都道府県名　その他は居住地が海外
※受賞者数は、こども読書推進賞受賞者、東日本大震災における貢献者表彰受賞者も含めての累計として足した数。

役員・評議員一覧

評議員

議　　長	増　岡　聡一郎	株式会社 増岡組　代表取締役社長
評　議　員	井　沢　元　彦	作家
評　議　員	ロバート キャンベル	日本文学研究者、早稲田大学 特命教授 国際文学館顧問
評　議　員	久　米　信　行	iU 情報経営イノベーション専門職大学　教授
評　議　員	徳　永　洋　子	ファンドレイジング・ラボ　代表
評　議　員	中　田　ちず子	中田公認会計士事務所　代表
評　議　員	前　田　　晃	公益財団法人　日本財団　専務理事

役　員

会　　長	安　倍　昭　恵	公益財団法人 社会貢献支援財団
副　会　長	内　館　牧　子	脚本家、東北大学相撲部総監督
専務理事	天　城　　一	公益財団法人 社会貢献支援財団
理　　事	浅　野　加寿子	放送評論家、NHK 会友
理　　事	犬　丸　徹　郎	ベルナルドジャパン株式会社　副会長
理　　事	海　原　純　子	昭和女子大学　客員教授
理　　事	川　嶋　　舟	東京農業大学農学部　准教授
理　　事	近　澤　守　康	一般社団法人 共同通信社　国際局長
監　　事	中　村　元　彦	中村公認会計士事務所　所長
監　　事	三　浦　雅　生	五木田・三浦法律事務所　弁護士

（敬称略・五十音順）

公益財団法人　社会貢献支援財団

設　　立：1971年5月1日
所 在 地：東京都港区西新橋1-18-6　クロスオフィス内幸町801
郵便番号：〒105-0003
ＴＥＬ：03-3502-0910
ＦＡＸ：03-3502-7190
ＵＲＬ：https://www.fesco.or.jp

社会貢献者の記録

2024年3月15日

発行者：公益財団法人　社会貢献支援財団

印刷：ヨシダ印刷株式会社

Supported by

日本財団

THE NIPPON FOUNDATION